

令和4年度 三島市議会経済建設委員会視察報告書

1 視察日程

令和4年10月12日（水）～14日（金）

2 視察先及び調査事項

(1) 山形県 酒田市

酒田駅前再開発事業について

(2) 山形県 鶴岡市

食文化創造都市推進事業について

(3) 山形県 山形市

山形市中心市街地活性化基本計画について

3 視察参加委員

委員長 甲斐 幸博

副委員長 岡田 美喜子

委員 鈴木 文子

委員 石井 真人

委員 河野 月江

委員 大房 正治

委員 古長谷 稔

4 報告内容

次のとおり

【視察地ごとの報告】

1 視察先 山形県酒田市

2 調査事項 酒田市駅前再開発事業について

(1) 概要

酒田駅前に誕生した、「交流拠点施設ミライニ」は、酒田市立中央図書館、酒田駅前観光案内所、広場、市営立体駐車場、バスベイから構成される公共施設と、再開発で整備されるホテル、バンケット等の民間施設とマンションからなる第一種市街地再開発事業によって建設された施設全体の延床面積2万3948㎡の複合型の施設である。

開発には、酒田市と西松建設が50万円ずつ出資をして株式会社を作り、調査設計費7億円、土地整備費10億円、工事費89億円、その他4億円で合計



110億円の事業となった。そのうち、事業への公費による補助金額は48億円（国24億円、県5億円、市19億円）であり、保留床処分金として、市は市立図書館等を購入するために30億円（うち国は12億）、民間企業

が32億円をそれぞれ負担している。実際に、最終的に市の負担した総額は37億円。

また、各公共施設を一体的にマネジメントするため教育委員会が所管し、施設管理を一括して指定管理者として、図書館流通センターに委託をしている。

当初提案時よりも総事業費が増加していることについては、当初の提案時の平成28年7月当時、総事業は102億円、公共施設購入費は27億円であったが、面積8%増加や復興需要の増加などの影響を受け工事発注時の平成31年1月の際には、総事業109.5億円、施設購入費は10%増加の29.7

億円となった。実施設計後から実際の工事発注までに9か月間空いているが、これは、実施設計後に出した金額が大幅に増額となったために、設計内容などを色々変えることで、修正や調整などに時間がかかったものである。

特に市立図書館の運営方法がユニークで、館内でBGMが流れたり、演奏会が開かれたり、勉強会を行ったり、飲み物を飲むことが可能であったりと通常では禁止されているようなことが、自由にできるようになっている。



また、他のレストランやホテル、イベント広場などの施設とも連携できる工夫がされるなど、酒田オリジナルの施設運営をされているのが特徴的であった。

(2) 所感

(甲斐委員長) 施設一括での指定管理者制度を導入したミライニは、とても斬新的な運営方法で、特に図書館の中でコンサートを開催するなど、市民団体の活用を積極的に行い、サービスの向上を図っていて、素晴らしい取組でした。

(岡田副委員長) 再開発ビル内の市立図書館は禁止事項のない図書館で、図書館の貸出しに限定せず、多様な利用目的に合わせた創りとなっており、空間も多目的に使えるよう空間が工夫されていた。今後の公共施設建設の参考にしたい。

(鈴木委員) 「ミライニ」はBGMが流れる中央図書館、高校生参加の観光案内所、広場等の複数機能の指揮系統を教育委員会が所管。施設一括での指定管理者制度を導入、民間ノウハウを活用しサービス向上を図る施設運営であった。

(石井委員) 提案時から基本設計、実施設計と完成に至るまでに市民との対話を重視し事業完成に至った様子が印象的であった。また、市立図書館の施設運営については、他の市立図書館にない館内のスペースを活かした運営方法は、今後の本市の図書館のあり方や文化プラザ、公民館などの公共施設の施設運営

にも参考になる内容であった。

(河野委員) 開発事業者の決定にあたっての公開プレゼンテーション審査の実施や、基本設計に係る市民説明会、パネル展の実施など、市民に本当に喜ばれる再開発にむけた徹底した透明性の確保の姿勢が、三島市とは全く異なっていました。

(大房委員) 令和4年7月オープン、総事業費110億円、補助金48億円、酒田市が50%出資し、ジャスコの跡地に、図書館・ホテル・レストランが「ミライニ」として完成。「ヒト・モノ・コトが行き交い、多様なコミュニケーションが創出され、知（地）的好奇心がインスパイアされるみんなの居場所」が基本理念でした。

(古長谷委員) 酒田市の図書館のコンセプトに驚愕。複合的な目的を掲げる「ミライニ」の中にある、移動できるお洒落な椅子や机であふれた、禁止事項のない図書館。フラダンスから室内スポーツまで、三島市でも運用ルール変更だけで実現可能な、多目的利用の発想の数々が新鮮でした。

【視察地ごとの報告】

1 視察先 山形県鶴岡市

2 調査事項 食文化創造都市推進事業について

(1) 概要

鶴岡市は、人口約12万人で、鶴ヶ岡城の城下町として繁栄した街である。山形県内では山形市に次いで2番目に人口が多く、面積は三島市の約20倍あり、市としては東北一広く、全国でも10番目の広さがある。海拔ゼロmから2,000m級の山々まで起伏に富んだ地形で、海の幸、里の幸、山の幸、「庄内米」や「だだちゃ豆」をはじめ市内の在来作物が60種類あるなど、たいへ



ん食文化に恵まれ、山岳信仰を通じた精進料理などを含めた多様な郷土食が大切にされてきた、次世代に誇れる様々な食文化が人々に根付いた街である。

これらを背景として、多様な食文化を保護しながら、創造的な産業の成長を国際的な連携のもとで進めていき、持続的な発展につなげようと、平成26年に国内で初めて、ユネスコの食文化創造都市に認定されたことは特筆に値する。

第1次鶴岡市総合計画後期計画から約13年間に渡り、総合計画の中でしっかりと位置づけながら、食や食文化を切り口とした特色あるまちづくりを進めてきたとのこと。現在は、令和元年から5年間を計画期間とする「鶴岡食文化創造都市推進プラン」を策定して事業を推進中で、食文化の伝承・創造と共に産業振興にも力を入れ、食文化を生かした交流人口の拡大も図りつつ、食文化を柱にした地域づくりを進めてきている。

コロナ禍でなかなか数値的成果が見えない中でも、料理人育成、料理人と生

産者の連携促進、フードツーリズムを通じた交流人口の拡大、海外へのプロモーション、食文化の学びを目指した交流イベント、訪日外国人誘致への挑戦など、鶴岡でしかできない、鶴岡の若者たちの心に響く、鶴岡ならではの政策を高く掲げ、市民にしっかりと根づいているようである。



(2) 所感

(甲斐委員長) 国内で初めてのユ

ネスコ食文化創造都市で、ユネスコ食文化創造の価値を生かした農林水産物のブランド化や販路拡大、料理人の教育・人材育成、また食関連産業を成長軌道に乗せるための様々な取組がとても参考になりました。

(岡田副委員長) 山・里・海の豊かな自然に恵まれ、食文化を切り口に産学官民一体となったまちづくりがされている。総合的に食のガイドができる「ふうどガイド」を養成し、持続可能な人材育成がされており参考にしたい。

(鈴木委員) 「食の理想郷へ」を掲げ料理人育成・確保、生産者との連携で産業振興、食文化の学びやイベント、フードツーリズムを担う「ふうどガイド」育成等で交流人口の拡大、学校給食、嚙下食メニュー開発などの取組があった。

(石井委員) 日本で最初のユネスコ食文化創造都市に登録され、食文化を軸に農業や観光、食育、食習慣など幅広い分野を横断的に繋げていることが印象的であった。市全体としてのコンセプトを「食文化都市」としてブランディングするという街づくりの手法について、三島のブランド戦略を今後考える上で参考になる内容であった。

(河野委員) 1市4町1村の合併による新鶴岡市の誕生後にかかげた最初の都市像「ほんとうの豊かさを追求する みんなが暮らしやすい 創造と伝統のまち 鶴岡」を体現した、国際舞台にも通用する食文化を通じた取組とその誇り

高さに感動しました。

(大房委員) 変化に富んだ地形がもたらす豊かな食材、多様な食文化の特徴を生かし、地元の山形大学や農林水産業と海外派遣のシェフ等が連携し在来作物を使うことにより、食文化創造都市のブランド力を発展されました。

(古長谷委員) 鶴岡市で最も印象的だったのは、あらゆる報告写真の中に、常に複数の若者が目をキラキラさせながら写っていたことです。若者たちが明るい未来を思い描きながら時代を切り開いていく。地方都市の政策のあるべき姿を見たようで、羨ましくすら感じました。

【視察地ごとの報告】

1 視察先 山形県山形市

2 調査事項 中心市街地活性化基本計画について

(1) 概要

山形市では、中心市街地における大型店の閉店が相次ぐ中、平成20年から計画期間約5年の中心市街地活性化基本計画が策定され、現在第3期計画の3年目を迎えようとしている。計画対象区域は、美術館や県郷土館などを含む、山



形駅東口から北東に広がる約127ヘクタールの商業地域中心の区域で、その面積は三島駅、三嶋大社、広小路駅を正方形で囲んだ面積（約67ヘクタール）の倍に相当する。

計画の第1期（H20～26年）では、区域内に3つの名所を作ることにより、観光客入込数の増加や歩行者通行量の減少に歯止めをかけることに成功する一方、空き店舗増加など新たな課題が表面化した。第2期（H26～R2年）は、回遊性向上や空き店舗解消、さらなる観光客の誘客を目指し、回遊性推進にむけた事業の総合展開や新名所の整備など91の事業を行った。新型コロナウイルス感染拡大や大型百貨店閉店の影響により、歩行者・自転車通行量は伸び悩み、観光客入込数は減少となったものの、空き店舗率は、リノベーション事業の推進や新規出店にかかる補助制度の創設などによって大きく改善した。

注目させられたのは、平成31年に上位計画として策定され、中長期的視野に立った中心市街地の将来ビジョンを示すことによって現在の第3期（R2～8年）計画の大きな礎となっている「中心市街地グランドデザイン」である。その肝は「商業のみのまちづくりからの脱却」である。特徴は、中心市街地の人口減

少やネット普及による商業吸収力の低下のもと、「商業強化・居住推進ゾーン」「歴史・文化推進ゾーン」など中心市街地をいくつもの分野でゾーニングし魅力を向上させ、エリアマネジメントすることによって、時代のニーズに合った“新しい”中心市街地の創造と価値の向上を目指すことにある。街なかへの居住ニーズや職住近接の意識が高いことを背景に、いくつもの空き家、空きビルを学生寮にリノベーションし、若者が住み集まる街に変えていっている実践などは、大学のある三島市にとっても非常に興味深いものだった。

この「中心市街地グランドデザイン」は、策定から3年間の変化をふまえて現在さらなる改訂が加えられ、新テーマ「歩くほど幸せになるまち」のもとに現在山形市ではいくつものプロジェクトが動いている。ウォーカブル



なまちづくりをめざす点、せせらぎをまもり生かすまちづくりという点、さらには官民一体となった公共空間の整備・活用という点で、三島市が直面するまちなかりノベーション計画とは多くの共通項を持っている。三島市のまちなかりノベーション推進計画では実現へ向けスモールスタートの実践・検証が始まっているが、中長期的視野に立った将来ビジョンの重要性を示唆する事例を学ぶ機会となった。

(2) 所感

(甲斐委員長) これまでの取組を継承・発展させ、新たな取組も加え、官民が連携し各分野の取組の効果を面的に波及、「訪れる人が歩いて楽しいと感じる」「住んでいる人が住みやすいと思う」まちづくりを推進していてとても参考になりました。

(岡田副委員長) 第3次計画を実施中で、アンケートや人の流れを細かく分析

し、コロナや社会情勢の変化に対応しており、中心市街地の人口増加につながっている。街中ではさまざまな実証実験が行われており、参考にしたい。

(鈴木委員) 「歩くほど幸せになるまち」をテーマに、五感で感じる歩いて楽しい住みやすいまちを目指し、御殿堰の沿道整備、中心市街地の空家や空ビルを活用し準学生寮整備、建物の歴史とリノベーションしたQ1は参考になった。

(石井委員) 中心市街地活性化において、ハード整備を行っていく中で、並行してソフト面からまちづくりを行うエリアマネジメント協議会を立ち上げ、徐々に横断的な組織づくりをしていることが印象的であった。三島市が進めているまちなかりノベーション推進計画も今後は、中心となる組織体が必要になるため、山形市の事例は、組織づくりの参考となる内容であった。

(河野委員) 区域の規模は三島市より大きいものの、ウォーカブルなまちづくりを目指すこと、せせらぎを生かしたまちづくり、近くに大学を有するなど共通点多々あり、多くのヒントが得られました。中長期の将来ビジョンを持つことの重要性が示されていました。

(大房委員) 「歩くほど幸せになるまち」をコンセプトとして①身体性(体感)偶発性、希少性の創出②滞在する場としての空間の整備③回遊できる仕組みづくり④みどり豊かな魅力ある空間の整備⑤官民一体となった公共空間の整備と活用⑥公共交通の活用促進⑦DXの推進。このことにより「五感で感じる」ことのニーズが高い中心市街地だと思いました。

(古長谷委員) 近くに大学があり、水を大事にし、歩くまちを意識している点など、三島市との共通点の多い山形市。第3期計画に至って、当初商業振興中心で進めてきた活性化策を、文化芸術や福祉、子育てなど居住者も意識してターゲットを広げ、バランスを取る方針に進化してきたとの話に、強く共感しました。